

## 大森義彦先生のご退職によせて

英語英米文学科教授 秋元孝文

大森義彦先生は、2021年3月末をもって文学部教授を定年退職されます。大森先生は、上智大学文学部英文学科を1975年3月に卒業され、同大学院文学研究科英米文学専攻を経て、1977年4月に24歳の若さで名古屋学院大学に助手として採用されました。その後甲南大学文学部英語英米文学科に着任されたのが1984年のことで、1988年には助教授、1998年には教授となられ、現在まで甲南大学で過ごされた期間は37年の長きに亘ります。

大森先生の研究分野はアメリカ文学で、研究生活の初期では、1976年にノーベル文学賞を受賞したアメリカのユダヤ系作家の代表格、ソール・ベローを主な対象として論文や研究発表を積み重ねて来られました。その後、90年代に入った頃から大森先生の関心は、同じエスニック・マイノリティでも、すでにエスタブリッシュメントとなっていたユダヤ系よりもさらにマイナーなチカノ文学へと傾き、南西部のメキシコ系の文学という肥沃な地へと分け入っていくこととなります。そうした中で達成された大きな成果が、2005年に単著としてまとめられた『アメリカ南西部メキシコ系の文学—作品と論評—』です。レイモンド・バリオ、トーマス・リベラ、ルドルフォ・アナーヤといった主要チカノ作家の紹介から、チカノ文学とインディアン性の関わりやリチャード・ロドリゲス論にまで至る本書は、日本のアメリカ文学研究の世界においてチカノ文学が初めて本格的に紹介された記念すべき達成です。チカノ文学は、ニューイングランドのピューリタン起源というアメリカ文学の神話に対して、南西部からそのオルタナティブたる視点を提供してくれます。サンドラ・シスネロス、カリ・ファハルド＝アンスタインといった昨今活躍する女性チカノ作家たちを考える上でも、大森先生が著された『アメリカ南西部メキシコ系の文学』はその出発点を知る上で非常に重要な一冊であり、日本のアメリカ文学研究における本書の貢献には多大なものがあります。

また、1995年には3人の共著という形で『はじめて学ぶアメリカ文学史』を出版され、大森先生は第一次

世界大戦以降の章を執筆されています。文学史を編むには専門分野以外をも含む広範な知識が必要であり、前掲の単著が大森先生の学識の「深さ」なら、こちらはその「広さ」が発揮されたお仕事だと言えるでしょう。

大森先生の学内の仕事で特筆すべきことは、やはり国際交流センターにおいて、1992年から5年間を副所長として、そして1999年からの2年間を所長として務められたことでしょう。国際交流センターは1990年に甲南・イリノイセンターを改組して設立されましたが、その設立にも尽力された大森先生は、副所長として甲南大学の国際交流の先頭に立ち、学生の海外留学を積極的に推し進めて来られました。受け入れ留学生を対象として甲南で行われる「ジャパン・スタディーズ」の講義も担当されました。現在の充実した留学プログラムの始まりには、大森先生の献身的な貢献がありました。また、2004年からは入試実施委員長の大役もお務めになりました。

青春ドラマの主役のように爽やかかつダンディで、いつも真面目で、確実に仕事を進めていく大森先生は、学科同僚からの信頼も厚く、何かと頼りにされる存在でした。私は個人的にも大森先生を大いに頼りにしていて、何か困ったことや悩みがあるといつも大森先生のオフィスを訪ねては話を聞いてもらっていました。そんな時の大森先生はいつも穏やかで、でも正直で、威張らず強がらず、なんでも話せるちょっと歳の離れたお兄さんのような感じです。そういう大森先生の懐の深さは学生たちにも広く知られており、大森先生の授業は面白いと評判で、ゼミはいつも人気があり、特に卒業した学生が大森先生を懐かしがる場面には何度も遭遇しました。そして大森先生が授業内外で披露された英語に関する蘊蓄を、みなよく覚えているのです。

お酒は飲めないけれど学科の飲み会には必ず参加してジンジャー・エールを飲みます。みんなが酔っ払っている中で、酔っていないのに上機嫌でダジャレ（一部の通からは「ウィットに富んだおしゃれなオヤジギャグ」との声も）を飛ばします。

その大森先生がご退職されるというのは、英語英米文学科スタッフ一同にとっても、本当に寂しいことです。「大森先生がいれば大丈夫」という安心感を先生は私たちに与えてくれていました。学科や学内のことを大局的見地から見て、判断を誤ることがありませんでした。そんな大森先生がご退職されたあとの英語英米文学科はどうなるのか、正直ちょっと予想がつきません。それでも我々は、大森先生が作って来られた英語英米文学科をさらに発展させるべく努力することだ

けは約束したいと思います。ダジャレを引き継ぐのは誰か、これはもう少し考えさせてください。

仕事熱心で打ち込んでこられた大森先生ですから、退職された後も、きっとすぐに新しい目標を見つけて楽しい日々を送られることと思います。ご健康には十分留意され、いつまでもお元気でいてください。長い間のお勤め、本当にご苦勞様でした。そして今まで、ありがとうございました。心より感謝申し上げます。